

伊達政宗重臣の逸話

ダイジェスト版

2019. 2. 23 佐藤

2024.1. 12 改①

■武将 伊達成実;政宗の従兄弟(叔父・実元の子)

①角田城接收の誤解

この角田接收事件が、[伊達成実に関する出来事でもっとも誤解されているもの](#)であろう。
すなわち誤解とは、

「成実の出奔後、政宗は屋代景頼に命じて角田城を召上げるべく武装包囲した。留守を守っていた成実家臣は30余人が討ち死にし、[成実の妻子もその際殺された](#)」と、いうものである。
明らかな誤りは、成実の妻子が殺された、という部分である。

成実の室が没した文禄4年(1595)6月は、成実出奔よりも前であるので、角田接收の時期にはもうこの世の人ではない。側室および側室腹の子どもはいた可能性は無いわけではないが、存在を立証できる史料は存在しない。*正室 亘理氏 1573-1595、子(女子)は早世。

そして「留守を守っていた成実家臣の30余人が討ち死に」は『[治家記録](#)』や『[世臣家譜](#)』に記載があるので誤りではない。しかしそこからイメージされる激しい城攻めは想像の産物である。『世臣家譜』によると、主な抵抗者である羽田右馬助がこもったのは「私宅」。すなわち城下の羽田屋敷であって角田城そのものではない。

さらに当時の成実家中の人数であるが、後に亘理2万石時代の人数が約1500人。二本松時代は3万石余と「世臣家譜」はいうので、角田時代もこれより少ない、ということはなからう。すなわち、抵抗して討ち死にしたのは「30/1500」に過ぎないのである。

「小競り合いはあったが、城は大過なく明渡された」あたりが実情ではないかと思われる。

なお、角田接收の経緯には別説も存在する。仙台志料『成実高野山に遁る』に紹介されている説だが、これによると、行われたのは「角田の接收」ではなく「羽田右馬助の誅罰」である。その理由は羽田が成実の出奔をそそのかしたことにあった。

その背景として、羽田の専横が角田の留守居の中でみられ、家臣同士の対立があったようである。羽田と並ぶ留守居役であった遠藤主計が、岩出山の屋代勘解由にこのことを通報、屋代は丸森の高野壺岐に命じて羽田を討たせた。

羽田の屋敷を包囲した軍勢の中には、成実家中の名がかなり見られる。あくまで「謀反人は羽田」との立場であった。羽田を討った後の成実家中、および角田城は、主の不在を理由に岩出山＝伊達本家の指揮下に入ったと考えられる。

この時期に羽田右馬助が家中から孤立していた一方、成実の全幅の信頼を得ていたことを示す伝承は他にもある。『[蟻坂文書](#)』に、金沢・内崎・沢尻・白根沢・石川以下相談申し候は、「成実公より羽田右馬助一人方へ密々の御状遣わされ、吾等どもは無きが如くになされ候条、無念に存じ候。このたび岩出山へ連判を以て申し上げべし」と、あるのがそれである。

②成実 右手のやけど

『政宗記』によれば、天正 13 年 12 月 11 日戌の刻(午後 8 時ごろ)、人取り橋の合戦後、成実は前線基地・渋川城で二本松への警戒にあたっていた。

成実が普段居室にしている座敷で、近臣が鉄砲の薬箱へ火を取り落としてしまった。火薬の上へ火を落としたものだからたまらない。あっという間に城中へ燃え広がり、渋川城は全焼してしまった。成実も危うく焼け死ぬところをどうにか逃れたが、右手に大火傷を負った。この火傷はひどいもので、治癒したものの、右手の指がみな一つにくっついてしまい、生涯それは治らなかつたらしい。ちょうど野口英世の左手と同じような状態になったわけだ。しかし普段寝起きしている座敷に弾薬を置いている、というのがスゴイ。

③成実の兜

兜には**毛虫をかたどった前立**をつけていた。

これは「決して後ろに退かない」という**毛虫の習性**にあやかつたものだという。この毛虫の前立は、現存する紺糸威五枚胴具足(北海道伊達市所蔵)と亙理町の**大雄寺木像甲冑像**で確認できる。

写真は、伊達成実霊屋の附木造彩色甲冑像、県指定有形文化財。



■吏将 茂庭綱元;政宗の官僚、官房長官

①綱元の武士道

伊達政宗の老臣鬼庭左月斎良直(綱元の父)は、天正 13 年(1585)に葦名・佐竹連合軍との人取橋の合戦で三倍の相手に奮戦するも、岩城氏家臣の窪田十郎に討ち取られた。人取橋の戦いで父・左月斎を討ち取った岩城氏家臣・窪田十郎が後に伊達軍に捕らえられた際には、「虜囚を斬るのは士道に悖る」として窪田を赦した。これに感服した窪田は願い出て綱元の家来になったという。



②茂庭家の長寿

茂庭氏が代々長寿の家系であると聞いた秀吉は、その秘訣を探ろうとして綱元に日頃の暮らしぶりについてあれこれ下問した。この時、綱元(石見守)が日頃から米粉を湯に溶いたものを服用していると答えたので、秀吉もこれを「**石見湯**」と名づけて服用するようになったという。

綱元本人は、藩主政宗の逝去(1636 年)後、先に早世した岩ヶ崎初代城主で政宗の五男・宗綱の菩提を弔うため、二迫文字村の館で供養に努め、1640 年、政宗祥月命日に 92 歳で没し、自身が再興した文字の洞泉院に葬られた。墓代わり? の自然石を加工した自身の坐像が有名である。側には、最期まで従った家臣遊佐道海の小さな墓石がある。茂庭家に伝わる『綱元君記』によれば、綱元の子は 8 人で、**21 才のときに、正室^{*1}との間に誕生した嗣子・実元を始め、78 才のときの常元^{*2}誕生までが記録されている。そのうち、50 才、52 才のときに誕生した女子(津多)、男子(宗根)の二人^{*3}は、政宗と秀吉の元愛妾・お香との間に生まれた子で、綱元が引き取り**



自分の子として育てたのが史実とされる。

- *1 後の岩ヶ崎領主中村氏の先祖で新田遠江守景綱の娘(二代目・義綱の妹)。
- *2 後に軽部家養嗣子に。三迫川流域の灌漑用水路・軽部川を開削した技術者軽部六右衛門の先祖。
- *3 津多は原田家に嫁ぎ原田甲斐を産んだ。宗根は、亙理氏当主・亙理重宗の婿に迎えられて亙理宗根と名乗った。

写真(上)は、松山町石雲寺の茂庭家御霊屋内の綱元坐像、宮城県指定有形文化財。

写真(下)は、栗原市文字洞泉院の小高い丘にある綱元の墓石。

③綱元の悩み、政宗からの信頼

綱元が隠居に追い込まれた原因として、賭け碁に勝った綱元が秀吉から愛妾「香の前」を賜ると、政宗が綱元に香の前を差し出すように命じたが、綱元がこれを拒んだために政宗の怒りを買ったとする説が有る。この説によれば、帰参の条件には政宗に香の前を差し出すことが有ったともいうが謎である。帰参後もその力を政宗に高く評価されていた綱元は政宗の長男である秀宗が現在の愛媛県にあたる伊予宇和島 10 万石の大名に任じられた際には主君・政宗の命により、現地に出向き藩の立ち上げという重要な役割を担った。

万事、卒がない吏僚(官僚)の面目躍如であった。

■智将 片倉小十郎景綱;幼少時の政宗教育係

伊達家中では「武の伊達成実」、「吏の茂庭綱元」と並んで、「智の片倉景綱」と呼ばれた。一説によれば剣術にも長け、幼少期の政宗の剣術指南も務めた智勇を兼ね備えた武将であり、また大変な**笛の名手**であったとも言われる。

・妻が重長を懐妊した際には当時の主君・政宗に未だ子がいなかったのを憚り、実子を殺害しようとしたが、政宗の説得により留まったと言われている。この時の小十郎宛の政宗の書状が残っている。

・景綱の知才は、時の天下人・豊臣秀吉にも高く評価された。

奥州仕置のとき秀吉は景綱を直臣に迎えようとして三春 5 万石の大名に取り立てようとしたが、このとき景綱は政宗への忠義を重んじ辞退している。写真は、片倉小十郎景綱肖像(仙台市博物館所蔵)。



●片倉小十郎の政宗説得、「秀吉の軍というのは」

天正 18 年(1590)3 月、伊達家中は真っ二つに割れていた。小田原役の勃発により遂に小田原城を大軍で取り囲んだ豊臣秀吉に対し、抗戦を主張する伊達成実を中心としたグループと、恭順を主張する片倉小十郎景綱を中心とするグループとで議論は全くまとまらなかったのだ。悩んだ伊達政宗は夜半、小十郎の屋敷を訪れ寝所にまで入ってその真意を質した。小十郎は言う。

「秀吉の軍というのは、蠅です」、政宗「ハエ?」、「そう。それも大発生をした蠅です。殿、大発生をした蠅にたかられれば、これをいくらたたき潰しても後から後から湧いてきてキリがありません。秀吉の大軍と言うのもそれと同じなのです。2, 3百の敵を討って、2, 3度防ぐことが

出来ても、秀吉は後から後から大軍を繰り出し、結局防ぎきる事など不可能なのです。そしてこのまま重臣の意見が一致せず殿が決断することがなければ、伊達家は間違いなく滅びるでしょう。だが、これをよくよく肝に銘じてください、伊達家が滅びても、家臣たちは機会さえあればまた、他家に仕えることが出来るのです。殿、これらを良く考えて、ご決断を。」これにより政宗は秀吉への恭順を決断したと言う。

・晩年は大層に肥満していた。『伊達家世臣家譜』によれば慶長 7 年(1602)、政宗より「年を取って太ったその体では重い鎧は身に合わないであろう」と軽い鎧を賜ったという。症状からの推定では、糖尿病を患っていたと考えられている。

●晩年に政宗が小姓に語った景綱による政宗の右脇腹の荒療治

伊達政宗が小姓の木村宇右衛門らに語った『伊達政宗言行録～木村宇右衛門覚書』では、若い政宗の右脇腹が脹満して治療も効かず不眠となり、政宗が自分で脇差を使い切開きたいが病苦で切腹扱いにされるのは困ると景綱に相談し、景綱は馬屋から丸金を焼いて持ってきて景綱自身の右腿に刺さるか試したあと政宗の腹に灸として刺して治療し、景綱は治るまで約 70 日かかったその自傷で後年まで乗馬時に足がひきつると政宗に語っていた。

●姉・喜多の訓導？

政宗の守役を 19 歳のころから勤めていた片倉景綱には、政宗の養育係であった喜多という異父姉がいた。この喜多は、文武両道に通じ男性にも引けを取らない賢女だったと伝えられる。あるとき、景綱が待遇に不安を感じて「諸国を廻って名将に仕え、天下に名を広げたいと思います。」と、姉に相談したところ、「主君を裏切れれば天がそれを許さないでしょう。誠意をもってお仕える事が貴殿の幸せにつながります。」と諭され、景綱は思い留まったという。

■片倉 2 代目片倉小十郎重長

・重長の母が重長を懐妊した時、主君・伊達政宗は前年に家督相続したばかりでまだ嫡子がなかった。このため、父・景綱は、「伊達家に嫡男誕生までは片倉家に慶事罷りならぬ」として生まれた子は直ちに圧殺するつもりであった。これを聞いた政宗は、「その方の言い分もあらうが思いとどまってもらえないだろうか。子を殺害するようなことがあればその方を恨むぞ。わしの顔に免じてどうか助けてやってほしい」という書状を景綱に出している。

・真田信繁の娘を継室とした(一説には奮戦する重長を大坂の戦場で見た信繁が、この将ならばと、片倉の陣に矢文を送り婚姻の儀申し入れたといわれている)縁により、真田昌幸・信繁父子の家臣を保護している。もともと阿梅は誰の娘か知られず片倉家の侍女をしていたが、真田氏の旧臣・三井豊前が片倉家を訪れ、真田信繁の娘であったことを初めて知ったという。信繁の次男・真田守信(当時は大八)、六女の阿菖蒲は阿梅の縁で片倉家を頼った。守信は白石で「片倉」姓を名乗り、子の代に真田姓に復した。阿菖蒲は片倉定広(田村氏の出で政宗の正室愛姫の甥)の室となった。

●政宗との別れ 1636 年、死期を悟った政宗は最後の参勤の途につく。このときの話。

政宗(70 才)が片倉 2 代目・重長の居城白石に着いた頃にはすっかり弱っており、食事もうろくにとれ

なくなっていた。翌日、心配し町外れまで籠に付き添った重長を政宗は励ました。

「明日にも天下に大事があればご先駆を承り、お前に先陣を務めさせ、成実に指揮をとらせ、三人心を合わせれば、また一花咲かせられよう。留守の間、国の守りはお前に頼んだぞ。だが」、死を予感してか初めての弱音が零れる、「おそらくは、もう会えぬだろうな」。

老いた主君の独眼から涙がこぼれ、鬼と呼ばれた男も声を上げて泣いた。

出立間際、政宗は見送りに出ている重長の嫡子三之助(7才)に自分の脇差をさしてやり、「小十郎はいつも良い子を持つな。祖父や父に負けぬ立派な武士に育てよ」と頭をなでた。

この幼い少年が後の三代景長で、寛文事件の際には混乱した国元を見事に取り鎮め、伊達家の安泰に大きく貢献する。初代景綱の小田原参陣のすすめ、二代重長の大坂の陣での武功とともに讃えられる片倉家の三功であった。授かった脇差を握り締め旅立つ主を見送った三之助はおよそ一月後、物言わぬ主君の棺を迎えることになる。

■片倉3代目景長

●松代藩主真田幸道が仙台藩主綱村に招かれ藩邸に赴いた時の話: 真田徹著『幸村の系譜』より

大坂の役後に行われた敗残兵狩り。当然男児たる信繁次男(守信)は捕縛対象だったのだが伊達家は高野山に守信の死を奏上、仙台にいる守信は伯父・真田信尹の架空の孫として幕府に嘘を届けた。この段階で伊達家と旗本真田家(信尹系)は危ない橋を渡っている。暫く後の延宝元年(1673)、幸道が邸内を案内されていると結び雁金の羽織(一部資料には六文銭)を着ている伊達家臣を見つけた。名を聞くと片倉沖ノ進という。前年から江戸御番として賓客対応の職務に就いていた。

だが片倉家の家紋は九曜紋である。不思議がって幸道は出自を尋ねた。沖ノ進は恐る恐る自らが真田信繁次男守信の子である事を告げる。

ところが、幸道は意外な縁を大いに喜んで沖ノ進の手を取って労いの言葉を贈ったと言われる。その後、真田家と伊達家でどんな話がされたかは不明だが「既に將軍家へはばかりに及ばざる」と、時の仙台藩主伊達吉村の命で沖ノ進は真田辰信を名乗る事になる。

信繁子孫である事は明治になるまで隠し通したが…これが今日まで続く仙台真田家。

■後藤信康の逸話: 至る所で自殺した逸話が残る。

①大坂冬の陣に漏れた事に嘆き悲しみ、政宗愛馬の五島に跨り青葉城本丸より崖下に飛び降り

死亡したという説。哀れんだ政宗公が飛び降りた崖下の川内追廻の蠣崎という場所に後藤を葬って神社を建てたのが馬上蠣崎神社(うばがみかきざきじんじゃ)の始まり。明治時代に仙台城が陸軍の管轄になったため、良覚院の跡地の一角に移ったのが現在の馬上蠣崎神社。良覚院は伊達家の庇護を受けていた修験道の寺だった寂れて廃寺になり、現在は良覚院丁公園になって残っている。

小生はこの話も神社の存在も始めて知りましたが、片平の町にあったんですね。

仙台市青葉区片平 1-2-18 です。

②亀岡の断崖絶壁から広瀬川に投身自殺したという説。亀岡といえば、亀岡八幡宮(青葉区川内亀岡 62)がある。1189年、仙台伊達氏の祖とされる伊達朝宗^{ともむね}が鶴岡八幡宮(鎌倉市)から伊達郡高子村に勧請した。その際、霊亀が現れたことから「鶴」ではなく「亀」岡八幡宮と称したという。以来、伊達家の氏神とされ、伊達氏の拠点と共に場所を移し、伊達政宗と共に岩出山に移り、その後、上杉景勝の領地となったので、密かに御神体を持ち出し、1640年に現在の瀧澤神社のある場

所に仮社殿が建てられ奉祀され、1683年に、仙台藩4代藩主伊達綱村が現在地に移したという。昭和20年、空襲で社殿焼失し、鳥居と石段が残った。現在は再建された本殿、拝殿などがある。

後に伊達の祖となる中村常陸入道念西(朝宗)が平泉藤原氏討伐(奥州討伐)軍に加わり下向するに当たり勧請した神社だけに、伊達家臣の後藤は大坂の陣に参陣できないで悲観した末の投身自殺の場所に亀岡の地を選んだのであろうか。本丸の崖に劣らぬ高い断崖である。

元東北大教養部の北西、川内三十人町の方角なので、近くの下宿した同級生も居るのでは。



馬上蠣崎神社 境内



同左 由緒書



亀岡八幡宮 入口の大鳥居

■片倉喜多の逸話

- ・京の屋敷暮らしの頃、豊臣秀吉が政宗の愛妾に恋慕し、献上を迫ったという。政宗は渋っていたが、喜多は伊達家の身を案じ、政宗の許可も得ず、伊達家存続のため政宗が留守のとき献上した。一愛妾を惜しんで秀吉から憎しみを受ける災難を未然に防止するための処置であったが、政宗は喜多の独断を怒り、その結果、喜多は蟄居させられたという。
- ・現在の白石市の市章である黒釣鐘は、景綱の姉、喜多が考案した旗指物の家紋が元になっているとされる。旗指物は3頁右上の景綱肖像画に見える。



- ・片倉喜多の父は三重臣の一人「吏の茂庭綱元」であることは知っていたが、母親が伊達氏の「一家」で新田中村氏の祖とされる「新田遠江守景綱」の末娘であることを最近になって知った。喜多の才覚、度胸など、父母のDNAを継いでいるのであろうか。

2024.1. 12 加筆修正